

21 函館五稜郭病院泌尿器科における 漢方薬の使用状況

函館五稜郭病院 泌尿器科

高橋 敦、松木 雅裕、中村 誠、小林 元気、
村山 聡一郎、彦坂 充俊

【目的】近年、泌尿器科領域において種々の疾患に対して漢方薬が使用されている。今回、当科における漢方薬の使用状況を検討した。さらに、がんの支持療法に対する漢方薬使用に関しても調査した。

【方法と対象】2019年1月から2023年12月までの5年間にわたり、当科（外来および入院）で処方された漢方薬の使用状況を分析した。

【結果】この5年間で1365例に対して1610処方が行われた。年次推移をみると、265例（302処方）、287例（316処方）、300例（354処方）、248例（296処方）、265例（342処方）であり、年間の平均は273例、322処方であった。使用された方剤の中では、猪苓湯（377処方）が最も多く、次いで大建中湯（244処方）、芍帰膠艾湯（128処方）、芍薬甘草湯（123処方）、補中益気湯（106処方）の順であった。これら5種類の方剤が全体の53%を占めていた。猪苓湯は膀胱炎や尿管結石に対する自然排石促進、下腿浮腫の治療に用いられていた。大建中湯は術後の腸運動促進に、芍帰膠艾湯は種々の泌尿器疾患による血尿に、芍薬甘草湯は尿管結石による疼痛やこむら返りに、補中益気湯は主にがん患者の倦怠感や食欲不振に対して処方されていた。また、がんの支持療法として使用された補中益気湯、人参養栄湯、十全大補湯、六君子湯、半夏瀉心湯の5剤に関しては、その処方数が61（全処方数の20%）、33（10%）、42（11%）、55（18%）、89（26%）と年々増加傾向にあった。特に補剤である補中益気湯、人参養栄湯、十全大補湯の処方合計数は、それぞれ42、26、30、43、69と近年増加を示していた。

【結語】当科における漢方薬の処方は年間を通じてほぼ一定であったが、がんの支持療法としての漢方薬治療は増加する傾向にあった。